

「新自由主義から新資本主義へ? : フーコーからの考察」* (ステファヌ・アーベル著)

山 本 泰 三・須 田 文 明

フーコーは、その資本主義概念が、真正なる問題（それを扱うためにすぐさま把握できるような）というよりもむしろ認識論的障害の次元にあるように思われる、そんな理論家に属している。どのような場合でも、マルクスのようなもしくはウェーバーのような人にとっては（だがドゥルーズが何らかの点でそこに属しているので、彼らにとってだけではないが）、彼ら自身の争点によって明確な課題を遂行するという義務がある。彼らの争点とは、「資本主義」を定義し、その法則を分析し、そのメカニズムを示し、その軌跡や様々な局面を解釈し、その貢献および矛盾、脅威などを評価することにある。だがフーコーにおける社会理論は、このような義務には服していない。マルクス主義により歴史的に掲げられてきた特定の[・][・][・]アジェンダに対するフーコー的なこうした距離の取り方は、様々な討議戦略の形で表明されてきた。本稿で我々は、同時代的状況の視点から、これらの戦略のいくつかが間接的に、特別な利点を有していることを示したいと思う。この同時代的状況とは、「新自由主義」（ネオリベラリズム）や「新資本主義」という概念がそれぞれのやり方で輪郭を描こうとしているものである。より正確には以下のことを示すことが目的となる。すなわち、フーコー的なテーマの使用——主として新自由主義的な文化や政治の分析枠組みにとどまっている——は、社会的および経済的形態としての資本主義自身のより実質的な特定の性格を考慮することができるように、拡張されなければならないということである。

1978年と1979年の講義の貢献

『監獄の誕生』は、支配的なマルクス主義的アプローチによって特権化されてきたテーマにとってはきわめて的外れな対象（現代の刑務所装置）を選択しているにもかかわらず¹⁾、マルクス主義的な読者に対して、既知の領域で自らを再発見するという印象を与えることができた。一方では、社会を支配し、それにいっそう深く浸透し、社会を自らの抽象的法則に服さしめる抑えの効かない力というイメージ、1975年の著作において疑いようもなく支配的であったイメージは、マルクス主義の多くのバージョン（「拡大再生産」過程の盲目的で容赦ない側面とその帰結を強調する）を想起させることができた。他方で、『資本論』第1巻から、フーコーは第

*本稿は、Stéphane Haber, «DU NÉOLIBÉRALISME AU NÉOCAPITALISME ? Quelques réflexions à partir de Foucault», *Actuel Marx*, n° 51, pp.59-72, 2012 の全訳である。

3篇および4篇の問題設定、つまり搾取の具体的形態、労働および労働者の生活条件へのその効果という問題設定を明確に再発見した。第7篇²⁾のスタイル、すなわちそれ自身としてとらえられた蓄積のダイナミズム（少なくともそれが階級の巨視的なレベルで観察される労働力のいっそうの動員をもたすかぎり）への検討をフーコーは排除している。だがそうだとしても彼は、マルクスがこうしたダイナミズムの分析にきわめて緊密に関連づけようとしていた特定の経験的テーマを再発見することになろう。『監獄の誕生』の中では例えば、これらの同一の、過剰かつ周縁的な人口（マルクスによれば工業的プロレタリアートの構成を伴っていた）の生産と管理が問題となる。思わざるこれらの類似性を完全に意識して、フーコーは決定論的にではなく、状況論的にこの類似性を説明した。すなわち権力の分析により明らかにされた社会政治的ダイナミズムが、たんなる随伴の原理にしたがって、産業革命によりもたらされた変容と「出会った」ということになる³⁾。「権力の網の目」(1976)といったテキストでは、こうした接近は、マルクスの貢献の純然たる再評価を導くように明示されさえしている⁴⁾。

こうした観点から、フーコーによって行われた講義は転換点をなしているのである。かくして安全性という概念から出発した1978年1月18日の講義で、この哲学者は生権力 *biopouvoir* の定義に経済的問題設定を統合する。生権力とは、『知への意志』がその利点を暗示するのみであった問題設定である⁵⁾。移行は副次的なように見えるかもしれない。というのもそれは、生命の実証的政治学というきわめて曖昧なテーマ（当初は『監獄の誕生』の特定の偏向を修正するためでしかなかった）を社会の政治一般のテーマへと拡張させようとする、偶然的な、いずれにせよ実験的な試みの形をとっているからである。しかし実際、経済的なもののこうした再考察が、この哲学者をして、マルクス主義と隣接した地帯から遠ざかるように促したことから、この移行の利点が生じたのである。あたかもフーコーが直接的に競争するためにその領域に移動してきたかのように、彼の考察はかつてこうした隣接領域で精緻化されていたのだったが。重農学派への準拠を元にして、フーコーは結局のところ、自由主義を権力のテクノロジーとして定義するに至る。かくして外見上、我々は、支配の破壊的な、ある種の存在論的優位性へと導かれるように思われる。しかしながらこうしたアプローチは、とりわけ規律訓練の重要性を相対化することになる。それは、「市民社会」とその自律性⁶⁾という膨大な問題設定の統合（マルクスは市民社会をこそ、後から振り返って自らの研究の出発点としていた）のゆえにである⁷⁾。しかも近代権力はまた、おそらくとりわけ、自律性——経済「法則」の優位性は、近代にとって範例となるような自律性を示した——を要求する市民社会の管理された構築をめぐって、作用するものである。

1978年2月8日の講義でなされた「統治性」という概念の導入は、市民社会の問題設定を考慮することで権力分析にもたらされた、不可避な変容の意識化を示している。一方でそれは、それまで慎重に迂回されていた、西洋的背景における国家とその形成というテーマの再領有を示している。このことは、労働—搾取という問題設定からかなり遠く離れた話題を設定している。他方で統治性概念の導入は、（フーコーが彼の以前の研究、とりわけ、おそらくは『監視と処罰』の中で信頼を与えすぎたことを暗に認めている）全体的機能主義により課せられた制約を大きく超えた権力モデルの拡張を要求する。

この哲学者の語り口において、二つの側面が広範に重なり合っている。こうして彼の眼には、

「統治性」の概念によって、数週間前に導入された生権力の問題構制——まず主権と正統性という問題構制の相対化を含意する——に固有な理論的ポテンシャルティは、国家の政治の研究というこの特権的な領野で実現するべく召還されるように思われる（それが市民社会の解放の契機を含意するかぎりで）⁸⁾。こうした解放的な次元の評価によって、『監獄の誕生』のほんの数ページの読解が生み出すことができた印象が、決定的に一掃される——すなわち近代的権力を分析することは、(マルクスが資本による労働の「実質的包摂」の名の下で記述したものに類似した、もしくはそれに近い) 規律的全体主義の、社会全体レベルでの到来を記述することと関連しているという印象が、である。

新自由主義

翌年の講義（『生政治の誕生』）で見られる新自由主義の分析は、つまるところ、生命の問題設定そのものから離れながらも、これらの直観を同時代の領域に拡張することで満足している。しかしそれは同時に、華々しい成果をもたらした。こうした成果は、現状分析に関して、市場の解放およびそれから引き起こされる病理についての単なるネオ・ポランニ的批判よりももっと遠くまで行きたいと考えている著者たちの注目を引いたと考えられる。

後に有名となるこれらのページ——戦後の西ドイツにおいて顕著な影響力のあった「オールド自由主義」の潮流（オイケン、レブケ）のすばらしい解釈を提案した——の支配的モチーフは、新自由主義が一般的に、より少ない国家へと縮減されるのではなく、社会の政治⁹⁾を関与させるということである。したがってフーコーが説明しているように、市場の開花を促す制度の実施のほかに、新自由主義は、(市場社会の一員として自らを構想し、まさにかかるものとして行動する経済行為者の能力に基づいた) 社会的自律性の意欲的な構築によって示される。ところが、経済学をテーマとしたこの哲学者がこのようなアプローチ（国家活動、もしくはより厳密には市場と国家の間の相互作用を中心とした）を展開したために、資本主義の理論に割り当てられるべき空間は、いっそう制約されているように思われる。たとえそれが、採用される戦略が、新自由主義的な理論の基礎的公準を慎重に許容するように限定されているからにすぎないとしても（「資本主義」について語ることは、「市場経済」を喚起させる際のもったいぶった、かなりポレミックなやり方をなしているに過ぎない）。経済活動およびその形態は、背景的数据として見なされること（これこそまさに『監獄の誕生』における場合である）をやめて、処理すべき歴史的問題の一部となるのである。

なるほど、マルクスとまったく同様にフーコーは、決定的な社会的形態の到来と関連づけられたものとして、またその再生産において特定の機能を有するものとして、ブルジョワ的経済諸概念を考えた¹⁰⁾。しかし明らかに、社会的なるものへの経済的なるものの埋め込みという主題の極端なバージョンに同意しながらも、それ以来、フーコーは西洋の経済発展を、完全に異種混合的で、それ以前の権力技術の発明と普及の過程に内在的に依存しているものとして見ているように思われる。ここにこそ、規律訓練的パラダイムから距離をとったことのもっとも顕著な成果の一つがある。1979年2月21日の講義で表明された積極的なテーゼによって、ことは了解済みのように思われる。すなわち、国家権力とその統治性に対する経済社会の依存のゆえに、

資本主義の乗り越えという観念について、また外在的な力として表象される資本主義という観念について思考することは、完全に不可能なのである。

「もし […] 経済学者たちによって「資本」と呼ばれるものが、実際には純粹に経済的な一つの理論に属する一つのプロセスでしかなく、経済制度としての一つの資本主義の内部においてしか歴史的現実を持たないし持ちえないとしたら、我々の知る歴史上の資本主義が、資本の論理の唯一の可能かつ必然的な形象「であるもの」として演繹されうるものではないということがわかりいただけるでしょう。実際には、歴史上一つの資本主義があるということ。特異性を持つとはいえ、しかしまさにその特異性を通じていくつかの制度的変容とその結果としての経済的変容をもたらし、それによって自らの前に一つの可能性の領野を開くような、一つの資本主義があるということです。資本とその蓄積の論理に全面的に準拠している第一のタイプの分析においては、ただ一つの資本主義のみがあり、したがってまもなく資本主義など完全になくなってしまふということになります。これに対し、もう一つの可能性においては、経済的かつ制度的な一つの形象の歴史的異質性があることになり、その結果、少なくとも少々歴史的距離をとり、少々経済的想像力をはたらかせるならば、その特異性の前に一つの可能性の領野が開かれることになります」(『生政治の誕生』邦訳p.204)。

特定のやり方で、以前のあらゆる発展に対して(明らかに反マルクス主義的な)論争的な意味を与え、こうした発展を完遂するのが、この外在的定式化なのである。「資本主義」の将来は完全に開かれている(資本主義を規定する制度的背景の可変性によって、またより一般的に「経済」をその背景から切り取ることができないことによって)という考え方とともに、フーコーの軌跡のこうした段階は象徴的に完成する(この段階では、マルクス主義との特定の問題設定との近しさがもっとも際立っていたように思われる)。今日の特定の理論家に見られる原則——それによれば、国家活動の中にその本質的な運び手を見出す権力形態という意味で、現代の局面は「新自由主義的」(経済学主義を促進することができるような意味での「新資本主義的」というよりも)である——は、1977-1979年のこうした考察に潜む理論的決断の遠い反響をなしている¹²⁾。

要するに、1977-1979年の講義の中で、力強い推論の直線的な展開をそれぞれ取り出すことができる。すなわち生権力→統治性→自由主義→新自由主義、という線であり、これは諸概念を漸進的に種別化しようとするものである。この哲学者は、創造的な即興の中でこれらの概念に出会ったのちに、聴衆を前にしてできるだけ正確な歴史的事実に応じて定義しようとしたのであった。『知への意志』の観念とは遠く隔たっているこうした推論の線は、それ自身においても、フーコーにより展開された議論においても完全には制約的でないように見える。この線は、それを構成するタームがこの線によってしか意味を持たないということを想定していない。新自由主義的モチーフへと導かない生権力や統治性といったテーマの理論的使用を想像することは可能なのである。だがこの線は真剣に受け止められるに十分な印象をあたえるように見える。しかしながら、もう一つの可能な線、すなわち生権力→資本主義という線が、歴史的により示唆的になることはなかったのかどうか、知らなければならない。こうした仮説の確認は、何かが概念とうまくいっていないという印象を強化させることになろう。こうした概念は、現状診

断を確立するために、政治としての新自由主義を強調することで満足せずに（このことはそれ自体としてはいかなる問題も提起しない）、国家の政治の到来、そしてついには市場的な新しい主体性の生産（その中心を占めている）の到来を、近年の歴史的進展のカギとすることになる。我々としては以下を指摘しておきたい。すなわちこれらの概念の疑問視は、現代資本主義の直接的な特徴づけを豊富にすることができ、そうするに違いないようなテーマを促進させる。

資本主義の外在性の明らかな終焉

現代的局面の「新自由主義的」特徴づけは、1970年代のフーコー的提案から派生し、それに依拠し、もしくはそこから根本的なインスピレーションを引き出すのだが、そこにおいて市場交換および制度としての市場が、近代の経済的組織の中心（たとえ異種混合的であるとしても）を規定している。資本主義の現代的、社会的、歴史的な理論（ブローデル、ウォーラステイン、アリギなど）に固有な概念の中心を占める以前に、マルクス主義的分析において同定されている¹³⁾ ダイナミックで、より正確には拡張主義的で浸透的な資本主義そのものの次元は、いわばカッコに入られているのである。そしてこのような操作が経験的な側面で妥当なものとして現れるのは、『共産党宣言』が主張していたような社会的関係のこうした永続的転換過程における主要な役割が、別の審級、すなわち国家に与えられる限りでのことである。我々のテーゼは以下の通りであろう。資本主義そのものの解釈を復権させるために必要なことは、再帰 *r  flexion* の運動であり、それは「再帰的資本主義」というかなり一般的な概念から出発して、「生資本主義 *biocapitalisme**」のより精緻なテーマに向かうことである。この運動は1970年代の偉大なフーコー的直観を今なお刺激することができよう。

「再帰的」な社会過程という概念（自己言及性という意味での）が、社会科学の間で流行している。つまりそれ以前の、もしくは現代的な社会過程の知的な考慮により、少なくとも部分的には再帰的〔反省的〕に社会過程が決定されている、ということであり、盲目的な成長モデルを否定する考え方である。いかにそれは新資本主義の種別性を説明するのであろうか。

いくつかの真の事実（「原始的蓄積」、植民地主義、帝国主義、戦争による暴力）に影響されて、マルクス主義は確かに、攻撃的で愚かしくも略奪的で搾取的な資本主義というイメージを促進した。資本主義はいわば、世界と人々に対して、是が非でも自己再生産するというその唯我論的意欲を押し通すだろうというのである。この意欲は、資本主義に棲まう盲目的な圧倒的傾向の原則に位置づけられる、と。しかし、たとえこれらの側面が消失しなかったとしても（とても消失するところではないが）、これらの側面は今日、別の特徴と共存し、しばしばそれらと混合する。より正確には、つまり社会的生活と個人的生活との自己再生産運動に結びつくこうとする資本主義、またこの運動と混合するべく、その自己保持傾向の水準を高めようとする

*〔訳注〕 *biocapitalisme* という概念は A. フマガリ にもとづくものであるが、「バイオ資本主義」と訳されることもある。本論文でアーベルはこれをフーコーにおける *biopouvoir* の概念と関連づけて論じている。*biopouvoir* および *biopolitique* についてはそれぞれ「生権力」「生政治」が日本語訳として定着していることもあり、本翻訳では *biocapitalisme* を「生資本主義」と訳している。

る資本主義と共存するのである。こうして例えば、国民的背景に応じて可変的なアクセントをともなって、世界レベルで範例的となった年金基金の静かな革命以来¹⁴⁾、個人は以下のように感じている。すなわち、自らの具体的生活条件（自分が享受する教育や医療の給付水準、自らの年金額など）は、もっともそれほど多くないとしても、その連鎖のおかげで、広くグローバル化した銀行や保険の世界——つまり新自由主義的な資本主義のあだ花——に自分が差し込まれていることに依存している、と。この現象が示唆していることを明示するならば、生きている脆弱な個人の運命、個人とその生活条件と、他方での金融システムとそのリスクに集中した世界市場との間に存在する関係の、直接性と可視性という印象に突き当たる¹⁵⁾。したがって、世界市場はもはや一挙に外在的に敵対的なものとして提示されるわけではなく、むしろある種の包摂的な巨大な現前（各人は良きにつけ悪きにつけ、いずれにせよそれに依存していると知っている）として提示される。この意味で、持続し巨大化するというそれ自身の傾向により突き動かされ、人間の生命を超えている、自律したシステムという考え——これは『1844年の草稿』の時代以来、近代的疎外の批判を刺激する考え方の一つをなしていた——は、説得力を失うに違いないように思われる。依存と共謀の複雑なネットワーク（年金基金が本質的なその運び手をなしている）を創出することで、いわばこのシステムの馴致の可能性、ないし「生きられた世界」に固有な明らかな親密さにおけるその静かな再吸収の始まりが確保された。したがって、逆説的にも、脱魔術化され、運命的で、結局シニカルな新自由主義の可能性が、2008年危機によって開示された局面を特徴づけているように思われる。そこでは、グローバルな金融システムの個人的存在への直接的現前という鋭敏な感覚が支配しており、その現前は、我々に対して運命として提示されることで、それは我々の心配や我々の犠牲に値するという考え方を当然なものとした。

敷衍するならば、社会生活および人間生活に対する資本主義の外在性（もしくはこうした外在性の表象）という歴史的に支配的であったある特定のモデルの衰退について語ることが興味深いように思われるのは、こうした意味においてである。この歴史的モデルにおいては、資本主義はまず客観的疎外の原則として提示された。ある特定の意味で、このシステムがかつてより「愚か」ではなく、従って他者的でなく、勢いによって訳もなく駆り立てられることもない、という印象は正しいことが明らかになる。こうした印象はある種の、根拠ある幻想に属する。

こうした印象を正当化することができるのが再帰的拡大というテーマである。「システム」の近い感情により特徴づけられた新しい意識形態をこえて、このテーマは以下のことを示している。すなわち、資本主義のダイナミズムを示している経済的諸活動は、その歴史的拡大の条件へと経済活動を力づくで統合するために、資本主義自身の歴史にとって、また領域にとって外在的な要素を領有する必要性に、かつてほどには依存していないのである。こうした外在的要素とは、従属させられる以前に、偶然に出会った要素である（自然資源や労働力、独立労働者の消費能力、資本主義以前の生産様式の貢献のように）¹⁶⁾。より再帰的な資本主義は、外在的要素を服従させるという課題の執行にはより少ないエネルギー量しか支出しない。この資本主義は、あれこれの特別な従属からでなく、結局、従属一般から本能的に逃れようとする。それは、（あらゆるものを包摂し、新陳代謝することになる）凶暴なる力のモデルによっては、

単純に記述されることはできない。こうして、それは資本主義が生命にとってそれほど外在的でなく敵対的でないように見えるようにという一種の希望に、かすかに応えるように思われる。このような再帰性の三つのケースが区別される。

もっとも単純な再帰性のモデルは、資本主義にとって、来るべきそれ自身の発展条件をあらかじめ予測して生産することにある（資本主義が単純に、たまたま自由にしえる機会を持ったような好都合な条件を使用することで生きているよりも）。その現代的局面において、このレベルでは、文化が支配的で、現実的で、象徴的な役割を演じている。というのも、もはや我々は単に市場社会で生きているのではなく、我々が生きているのは以下のような社会、つまり「マーケット」（グローバルな金融市場により要約される）を大規模な集合的投資の対象とし、想像力と集合的利益の源の一つ（大先生の研究に浸みこんだそれも含む）とさせるような社会に住んでいるからである。こうした市場は、その多様で神経症的な展開によって、また我々が市場について抱いている絶えることのない言説によって、市場についていたるところで与えられているグラフィックなもしくは図像的な表象によって、公的空間の中心でのその厚かましい定着（タイムズ・スクウェアでの株価の瞬時の掲示、あるいはテレビの情報チャンネルについて考えてみるだけで十分である）によって、遍在するようになったのである。利潤追求に伴う現象（生産と消費の増加、技術的進歩、使用とサービスの一層の商品化、商品交換の強化など）は、たとえば新しいスタイルの個人的・集合的耽溺のテーマをなしている新規な活用法の対象となり得る、という事実の説明の一つがここにある。それをめぐって「文化」が再定義されるこうした発展は、資本主義が、制度や、最終的には個人的心理そのものに対して、無制限の拡張のモデルにたどり着くよう求める運動の帰結として解釈することができる。このモデルはハイパー生産力主義とハイパー消費主義の様式の下で、生命そのものによって取り入れられるにまで至るのである。こうした要求の定式化が、注意深く考えられた戦略、もうけのある生産的・商業的活動の対象となる限りで（マネージメント、マーケティング、コーチング、広告など）、資本主義への積極的同意の形成が、資本主義的生産一般の中心的活動の一つとなったのであり、そしてその将来の拡張システムによる予測の優先的チャンネルの一つとなったと言える。

再帰性の第二のケースは、資本主義が、それ自身の拡張運動の「現在の」帰結を、その将来の拡張の前提へと変容させる場合である。まず頭に浮かぶこうした内生化的最初の例は、資本主義自身に関連した活動により引き起こされる損害（環境的、技術的、身体的、心理的）を修復するという資本主義の発展に関連した例である。ここでは、生産された財やサービスは、古典的観念におけるような自然な必要性・集合的習慣もしくは個人的な気まぐれから生じたニーズではなく、資本主義的發展そのもののコストに応える。このケースの第二の説明としては、2000年代を通じた金融の暴発的飛躍が、凡庸な投機熱と異なっていたことを思い浮かべることができよう。つまりそれは、債権の証券化のスパイラル的過程に依拠した、その存在そのものによって衆目の前で生み出されるリスクに対して（少なくとも理論的には）保証するための、非常に考え抜かれ企画された商品の発展によって広く養われていた。したがって、それは拡張についてのある種のリスク意識（ここでは、大量の資金と、擬制資本の拡張）をかなり体験し

た拡張であったし、これらのリスク——拡張を刺激する拡大再生産過程の現在の特定の成果を、直接その将来の成長の前提条件へと変容させようとした拡張——への回答であった。

最後に、第三の再帰性の様式が観察されるのは、過去の拡大局面の条件が、拡大された自己再生産過程の継続のために現在に動員されているときである。D. ハーヴェイはこうした現象を説明して、たとえば以下の皮肉な事実を強調する¹⁷⁾。つまり、集合的財産権と公共サービスの民営化——近年の資本主義的發展を象徴し、部分的には促進している——は、自由主義的資本主義のおかげで、以下のような社会的装置が再構築されていたことを意味する。すなわちこうした装置は、資本主義の発展段階の以前の局面に固有な不公正や疎外の効果を制限するために広範に精緻化されていたが、またそれは、共産主義国以外でも、1945年以降の時期におけるその復興を可能としていたのである。1980年代に始まった民営化の国際的潮流とともに、有名な「創造的破壊」の長所の補足的な証明が重要であっただけでなく、それ自身の以前の形態、それ自身の歴史的ダイナミズムの別の時代の名残（あたかもこの名残が、ある種の入手可能な外部資源を成していたかのように）を、資本主義が使用するための、ある種の技術が重要なのであった。ローザ・ルクセンブルク主義的モデルに直面して（前資本主義的経済形態を搾取し破壊するメカニズム）、その生き残りを、次いでその多幸感的發展を保証するのにかつて貢献してきた制度とメカニズムを、資本主義が気楽に「包摂し」、搾取すること（単に放棄するだけでなく）が重要なのである。

この点について結論づけよう。1970年代においてハバーマスとルーマンとの間で提起された論争が想起される¹⁸⁾。特定の社会過程（資本主義的「成長」はそのパラダイムと同様その支柱を形成している）が提示する自動性と匿名性という外見は、これらの過程の原則を形成しているシステムの本質的不合理性（例えば、道具主義的行為に特徴的な狭小さおよび盲目性に由来する）の顕れではないだろうか（ハバーマス）。それとも、むしろ逆に、こうした外見は、ますます複雑になった環境に直面するさいの、これらのシステムの驚くべき能力、したがって、もっとも不透明で反抗的な環境にいたるまで、人間的知性と意思の権力を伝達する能力なのであろうか（ルーマン）。これらの古い議論の正確な内容にまで立ち返ろうとはせずに、我々が言えるのは以下のことである。合理化のさらなる進展の果てに、現代的、もしくはそれ以前のそれ自身の実現に再帰的に依拠することで、自己再生産し、その将来の拡大再生産の条件をプログラム化することがいっそうできるようになった資本主義は、抗いがたく「ルーマン的な」何ものかを持つことになった。こうして、資本主義が促す侵略と搾取の衝動の一部を昇華させることで、資本主義はいくつかの外在性の脅威的特徴から脱却するように見える。

生資本主義

我々の仮説は以下のとおりである。新資本主義を部分的に特徴づけているこの種の「再帰的拡大のレジーム」の実現は、親和性の強い関係によって、もうひとつの別の特徴に結びついている。これこそが、資本主義に対して、生きられた個人的経験への真の手掛かりを保証している。すなわち「生資本主義」というタームが構想させてくれる特徴である。そこにはおそらく歴史的に補完的な二つのやり方がある——最初のやり方はむしろシステムによって「上から」

の、第二のそれはむしろ「生きられた世界」との関係で、「下から」のやり方である¹⁹⁾。つまり資本主義（少なくとも、特定のその顕著な顕現において）は、盲目的で暴力的な拡大のモデルから脱却している。このモデルはこうした拡大に特徴的であって——「成長」のインフラとして、いっそうの商品化と賃労働化の相関物として考えられている——、『資本論』（ロワによるフランス語訳による）の第1巻の第8篇となるものの中に、もしくはローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』の中に設定されている。生資本主義自身が、いわば一種の再帰的蓄積レジームの実現の具体的代償をなし、システムと生命との矛盾を克服する傾向が社会的経験領域に伝達されるさいの主たる方法を示している。

メタファー的もしくは不明確な意味以外のいかなる意味において、生資本主義について語ることができ、また現在の拡大が少なくとも部分的には、生政治的であると断言できるのであろうか。換言すれば、この拡大はそれに衝撃を与え、迫害するために「生活世界」の外側からやってきたのではなく、その領土、その中心そのもの（この場合、有機的生活そのものの中に）におだやかに定着し、その資源で養われ、翻って生活世界を豊かにするのではないだろうか。

この議論を導入するために、A.フマガリ²⁰⁾ などのような著者によりつねに強調されているもっとも単純な経験的議論は、労働と「生活」との間の境界線（かつては切断されていた具体的な存在的背景）の消去にかかわる。その診断はよく知られている。すなわち現代経済の世界の重要な領域において、非物質的・協働的労働が支配している世界では、生産活動はインフォーマルな能力（そこではパーソナルなことと職業的なこととがもつれている）に準拠している。しかし現代的な新資本主義の生政治的次元は、このイタリア人経済学者によれば、よりいっそう透明な形態で表明される。まずそれは、健康の維持、自己の向上（パフォーマンスの改善）と変容が、現代の生産主義と消費主義の本質的な源——今日、それなしには権威の行使が非正統的と思えるようなエンパワメントの相関物——となった、という直観的断定のおかげで正当化される。生権力的テーマの含意は結局、以下の事実を示す。すなわち商品（部分的に幻影的であろうが重要ではない）の構成的イメージは、今日、もはや単に有用な外在的事物、典型的な世帯に向けられた冷蔵庫、もしくはフォード車であるだけでなく、人へのサービスでもあるのである。このことは個人的厚生をより直接的に保証し、それはより直接的に、客観化された工業製品のぶしつけな媒介なしに、生活の、そのニーズの、その刺激のサイクルに統合される。

端的に言って、資本主義（最もダイナミックで、最も利潤があり、同時に最も神話化されたその産業により具現された）はますます、厳密な意味での生——人間の主体は、まず、具現された主体として、この生を直接的に経験する——を中心として展開している。資本主義は身体の管理、身体の柔軟さ、その衰えの配慮（弱さ、病気、老化）、開発されていない身体の潜在力、その相対的力強さ——コミュニケーション的、リビドー的な身体の力の基礎である——を中心として展開している。こうして、マルクスによれば資本主義一般に特徴的な労働力の体系的臨検への傾向が、それ以降、倍増される。つまり、それは個人的有機的生命の支援、刺激、発展のある種の普及プロジェクト——その実施は、ニーズの市場的表明と、戦略的な個人主義的生活保障を結合した経路を通る——によって倍増されるのである。あるいはむしろ、二つのプロ

ジェクトの混合があり、こうした混合は、労働でのまた労働以外での活動の継続性により表象される。こうした活動の継続性により、(資本による労働の)「実質的包摂」の、横断的な新たな様式が実現される。身体そのものの(肯定的であれ、否定的であれ)具現への配慮が、(コレージュドフランスでのフーコーの講義で指摘されたオールド自由主義者たちによりかつて主張されていた)、見かけ上とはいえ、すべての個人の自己商品化、資本主義システムの直接的アクターへの変容の源をなしている。こうして活力の盲目的で攻撃的な否定よりも、むしろ強められたカリカチュアに我々は関係している。より日常的な意味での「生資本主義」は、例えばバイオテクノロジー²¹⁾や医薬品産業、応用生物研究、最適化医療に関連することができる。生資本主義は、価値増殖の目的に固有なこうした生命の衝動、体系的拡張と活力ある拡張とを接合するためのこうした試みの主要な相関物をなしている²²⁾。おそらくこの資本主義は、フーコーがその豊かさを垣間見た「新自由主義」の政治的カテゴリが構想させてくれるものの現象よりも、より深遠でより持続的な現在の水準をなしている。

それが何であれ、こうした断定から引き出すことができる明らかな結論は以下のようなものである。すなわち、資本主義は、フーコーの概念化によって明示された軌跡に従って進化してきたということである。なぜなら、我々は国家の政策といった新自由主義へのその暗示がもたらす、もちろん理解し得る魅惑から少し距離をとっているからである。あたかも、生資本主義が生権力(フーコーは徐々に、その研究においてこれを放棄するようになっていく)を引き継いでさえるかのようにことが運んだのである。なるほど『監獄の誕生』の著者自身が最終的に考えていたように、それ自体としてとられた「資本主義」への執拗な言及は、搾取の中心性への(誤った)信念へと閉じこもるリスク、自壊する以前に社会と個人に飛びかかろうとする貪欲なある種の巨大システムの容赦ない進化の(ありそうもない)批判へと閉じこもるリスクがあった。そしてこのことから最終的に以下のことが明らかになったのである。すなわち彼が考えるべきことは、逆に、生来の共謀、生命と支配との間での、生来の間帰属 *entre-appartenances* であり、たんに可能性の条件としての搾取ではない、ということが。資本主義の近年の進化こそが、我々に対してこうした古くからの反感が及ぼす影響力を和らげるのである。

こうした進化そのものから何を結論づけるべきであろうか。ただたんに、以下のことである。生きているものの秩序——(その現れとその具体的社会的効果の全体を含む)新資本主義によって、請われると同時に脅威にさらされ、刺激されると同時に道具化され、挑発されると同時に傷つけられている——を前にして、システムと、システムを運ぶ生命との対立を克服するという約束は守られなかったし、それはできなかった。したがって、現在の経済危機は真理の契機として解釈することができるのだが、そのおかげで以下のことが理解されるのである。すなわち資本主義の再帰的変転は、結局のところ、長期にわたるますます不条理になった軌跡の勢いに乗って続く、いくらか独創的でいくらか刺激的な一つのやり方でしかない。それは単なる迂回のようなものなのだ。

注

- 1) G. Ruche et O. Kirchheimerのすばらしい先駆け (*Peine et structure sociale* [1939] Paris, Cerf, 1994) にもかわらず。この著作の、明らかにマルクス主義的なテーマの一つは以下にある。すなわちブルジョワ社会は、苦痛の実施の功利的観念を促したということである。この観念は、ブルジョワ社会を監獄装置の設置にまでいたらせ、監獄装置によって、囚人たちは低賃金労働者へと変容されたか、もしくは、少なくともこの装置は、超過搾取されたプロレタリアートが被る処遇から着想を得た。
- 2) この第7篇の分割は1872年のフランス語版からしか登場していない。
- 3) M. Foucault, *Surveiller et punir* [1975], Gallimard, 1993, p.257以下 (田村仮訳『監獄の誕生』新潮社、1977) を参照。
- 4) M. Foucault, *Dits et écrits*, IV, Paris Gallimard, 1994, pp.186-189 (『フーコー思考集成Ⅷ』、筑摩書房、2001)を参照。『資本論』における搾取の具体的条件の研究を想起させることで、フーコーはマルクスを、国家主権という現象に対して、分散された権力分析の先駆者とし、したがって法的ではなく技術的要素を前面に押し出す。
- 5) M. Foucault, *La Volonté de savoir*, Paris, Gallimard, 1976, pp.183-186 (渡辺守章訳『知への意志』新潮社、1986) を参照。さわめて濃密なこの文章において、フーコーは生権力を以下のように定義する。すなわち人体の「解剖学的＝政治的なもの」(監獄に関する著作において広く展開されている) および「人口の生政治」とがその種類であるようなジャンルである。次いで、『監獄の誕生』において存在するこの生権力というテーマの増殖が明らかに重要である (pp.257-258)。つまり権力の変容と資本主義的發展との間の交差点としての19世紀の工場の規律である。奇妙なことに、この新しい二重性は『資本論』第1巻の方向づけを想起させる。すなわち工場の規律と、人口の全般的な管理 (それが、資本にとっての「予備軍」の形成を説明する限りで) とを同時に研究することである。あたかも1976年の再定義が、マルクスによるいくつかの経験的分析を説明することで、フーコーが行ったような批判から生じているかのようなのである。
- 6) いわば『知への意志』がこうした展開を可能とさせた。すなわち我々が、そのことを知らずに、圧倒的な支配装置に従属しているのではなく (『監獄の誕生』)、今日我々が自由でありたいと望むやり方が、なお権力の特定の秩序に帰属していることが問題なのである。ここにこそ、以下のテーマをアクセス可能としたものがある。すなわちそれによれば、現代の「近代性」は、権力の言説が絶えず自由について語り、個人的開花の展望に位置づけられるという事実によって特徴づけられる。新自由主義のイデオロギーはその明快な例を形成している。
- 7) K. Marx, *Contribution à la critique de l'économie politique*, Paris, Editions Sociales, 1977, « Préface ». (「序言」、武田隆夫ほか訳『経済学批判』岩波書店、1956)
- 8) 批判が、幻想だけなのではないとしても、批判は我々にとって、まず「世論」の統治モデルにしたがった権力の新しい形態の設定として提示される。こうして権力と批判との歴史的共同帰属というテーマは、この時期のフーコーの研究におけるこうした考慮と対をなしている。«Qu'est-ce que la critique?», *Bulletin de la Société française de Philosophie*, 1990, vol.84, no.2, pp.35-63 (中山元訳「批判と啓蒙」、私は花火師です』筑摩書房、2008) を参照せよ。
- 9) 同時期に、*Le Capitalisme utopique* (Paris, Seuil, 1979) のなかでP. Rosanvallonはこのテーゼを擁護している (P. ロザンヴァロン『ユートピア資本主義』長谷俊雄訳、国文社、1990)。彼もまた、マルクス主義への厳しい批判に連なっている。すなわち彼は、さらに権威的な潜在力に富んだ幻想、全般的交換のレジームの本質的に反政治的な全般化により透明となった社会という幻想から脱却しなかったであろう。

- 10) J. ビデが指摘しているように、マルクスが、これらの概念はすでに抽象的な富を指していると考えたとしても、フーコーは、これらの概念が、それによって人口の厚生を保護する契機を真剣に受け止めている。J. Bidet, «Foucault et le libéralisme», *Actuel Marx*, no.40, 2006/2, p.169以下を参照。
- 11) M. Foucault, *Naissance de la Biopolitique*, Paris, Seuil/Gallimard, 2004, pp.170-171 (慎改康之訳『生政治の誕生』筑摩書房、2008、p.204)
- 12) P. DardotとCh. Lavalの著作 (*La Nouvelle Raison du Monde*, Paris, La Decouverte, 2009) は、明白でもあり、驚くべきことでもある主張にそのすべての重要性を与えている。すなわち、新自由主義に対するフーコー的な提案の本質は、経験的に検証されてきた。この30年以來、「現実中存在する」新自由主義は結局、市場を利するための国家の全般的退却を意味してこなかったし、むしろ、「構築主義的」プロジェクトに応じたその活動の方向転換を示してきた。すなわち市場社会の建設である。かくしてこの著者たちにとって、パブリック・マネージメント——他の名前による国家的力の確認の継続——が、政治的・行政的権力の執行の再構成の源泉をなした。その効果は企業における組織的進化と関連していた（フレキシビリティ、労働の強化など）。今日、広く受け容れられている仮説——この仮説によれば、現代はマネージメントと消費主義を通じて、個人性の形態と、実施される競争的効率性と自分自身への道具的関係を中心とした個人性と個人化の規範の形態を促すという——を採用して、DardotとLavalは、フーコー的分析の意味をラディカル化し、おそらく明確にする。すなわち、とりわけ新自由主義的な政治において純然とした「権力」の中核は主体の成功せる生産である（例えば、影響力や制約、支配、新しい種類のコンフリクトの発生、もしくはオリジナルな集会的活動の登場原則などではない）。V. Lemm, (dir) *Foucault: Neoliberalismo y Biopolitica*, Santiago, Universidad Diego Portales, 2010.を参照せよ。しかしながら我々は、幾人かの著者たちは「新自由主義」という用語を、フーコー的背景 (DardotとLavalのそれである) なしに使用していることを指摘しておこう。それは例えば、D. Harvey, *A Brief History of Neoliberalism*, New York, Oxford University Press, 2005 (D.ハーヴェイ『新自由主義』渡辺治監訳、作品社、2007) もしくはG. Dumenil et D. Levy, *The Crisis of Neoliberalism*, Cambridge, Mass, Harvard University Press, 2011であり、そこでは資本主義の一つの特定の段階を描いている。本稿では、我々是用語のフーコー的、ポスト・フーコー的使用のみを議論するのであって、それは政治的および文化的側面の反経済学主義的強調を関与させる。
- 13) それは『共産党宣言』の最初のテーマをなしている。労働の賃労働化と財の商品化を基礎にして、資本主義はこのとき、くり返される社会的変容の要素、世界レベルでの交換の絶えざる集約化の要素として現れる。『経済学批判要綱 Grundrisse』の中でこれを指摘したマルクスは、『資本論』の話題の、この種の「ウェーバー的」、ないしは「ブローデル的」考慮を排除したかったように思われる。『資本論』は、拡大再生産の構造的活力（第2巻）と、搾取のダイナミズム（第1巻）とを強調することで、資本主義そのものの内的歴史にはあまり場所を与えていない（それはほとんど存在せず、所々で、原始的蓄積についての節においてでしかない）。
- 14) P. Drucker, *The Unseen Revolution, How Pension Fund Socialism came to America*, New York, Harper and Row, 1976 (P.ドラッカー『見えざる革命：年金が経済を支配する』上田惇生訳、ダイヤモンド社、1996) ; S. Montagne, *Les Fonds de pension. Entre protection sociale et spéculation financière*, Paris, O. Jacob, 2006.
- 15) コントロールとインセンティブとの作用によって、国家は個人的意思決定と金融世界との間での流動的なコーディネーションを組織化することで満足するかもしれない。国家はこの二つの審級を、ケインズ主義的＝フォード主義的局面においては、なお統治しようとすることができたのである。
- 16) 『要綱』 (*Grundrisse*, Paris, Éditions Sociales, 1980. 資本論草稿翻訳委員会訳『マルクス資本論草稿集1 1857-58年の経済学草稿第1分冊』・同『2 第2分冊』大月書店、1981・1993) の文章の中で (t.1, p.398)、マルクスはすでに、以下の事実を強調していた。すなわち成熟した資本主義の特性は、自らの再生産

の条件を創出し、存在させる（ヘーゲルの言葉で言えば「提起する」）ことができる能力に由来する。財への需要（生産の発展にとって必要な）は、こうして、消費の前商業的形態の（引き起こされた）破壊により準備されていたのである。我々が取り上げる再帰性の現象は、こうした特徴のまばゆいほどのラディカル化を示しているように思われる。G. Arrighi, *The Long Twentieth Century*, London, Verso, 2009. (G.アリギ『長い20世紀』土佐弘之監訳、作品社、2009) は、以下を示すことで魅力的にこのマルクスのテーマを展開する。すなわち資本主義の歴史が進めば進むほど、世界システムにおけるヘゲモニー地域は、自らの永続性をリスクや偶発事から免れさせるために、多数の複雑な機能（軍事的、政治的、商業的、生産的、金融的、文化的等々）を確保するように運命づけられる。

- 17) D. Harvey, *The Enigma of Capital*, London, Verso, 2010. (森田成也ほか訳『資本の〈謎〉』作品社、2012)
- 18) J. Harbermas, N. Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie?*, Francfort, Suhrkamp, 1979. (佐藤嘉一ほか訳『批判理論と社会システム理論：ハーバーマス＝ルーマン論争』木鐸社、1984-1987)
- 19) J. Habermas, *Theorie de l'agircommunicationnel* [1981], Paris, Fayard, 1987, t.1 (河上倫逸ほか訳『コミュニケーションの行為の理論』未来社、1985-1987) におけるハーバーマスの用語を使うならば。
- 20) A. Fumagalli, *Bioeconomia e capitalismo cognitivo*, Rome, Carocci, 2007.
- 21) N. Rose, *The Politics of Life itself. Biomedicine, Power and Subjectivity in the Twenty-First Century*, Princeton, Princeton University Press, 2007. (N.ローズ『生そのものの政治学』檜垣立哉監訳、法政大学出版会、2014) を参照。 *Actuel Marx*, no.41, 2007の特集「Corps domines, corps en rupture」も参照。
- 22) M. Hardt et T. Negri, *Multitude*, Paris, La Decouverte, 2004 (ハート&ネグリ『マルチチュード』幾島幸子訳、日本放送出版協会、2005) にあっては、生権力とは、著者たちがまず社会的活力の観点から記述する生政治を、自発的に服従させる試みとして定義される。それは不当にも、身体的・生物学的媒介には特別な重要性を与えていないものの、こうした立場は、生資本主義の問題設定に精神的・集合的活力の全体的な領域を統合することを可能とさせる。

